〔研究会合宿報告〕

中世史研究会夏季合宿報告

八月二十三日より同二十八日まで、静岡県引佐郡細江町に於いて夏季合宿を行ない、中世文書の講読を行う傍ら浜名湖周辺のの史跡見学を行なった。中世史上この地方について特筆すべきことは、南北朝の内乱に於いての宗良親王の活躍である。ここに宗良親王の動静をこの地方を中心として概説しておきたいと思う。

宗良親王は後醍醐天皇の皇子で、始め延暦寺に入り尊澄法親王と称したが、その後父帝の討幕運動に参加。元弘元年捕われ讃岐に配流。幕府滅亡後、延暦寺に戻った。その後、延元二年の末この遠江の地、井伊氏の館に入ったのである。それは、この頃井伊氏は南朝に味方しており、浜松庄・都田御厨が、それぞれ南朝の廷臣西園寺公重、洞院実世の所領といったふうに、南朝勢力の比較的強い地域であった。つまり海道諸国の中で南朝の根拠地となる条件をもっとも備えた国ということができる。しかしこの頃、義良親王を奉じて陸奥にいた北畠親房の子顕家は、鎌倉に進撃して足利方の関東留守役に当る斯波家長を亡ぼしてさらに、延元三年正月遠江まで攻め上ってきた。そのため宗良親王はこれに乗じてその軍に参加、一時遠江を去り諸国を転戦、その後一旦吉野に帰った。しかし五月に北畠顕家が石津に陣歿し、閏七月新田義貞が越前藤島で戦死すると、劣勢になった南朝勢力を挽回すべく、延元三年九月宗良親王は義貞親王、北畠親房等と共に伊勢の大湊を出船して東国に向かった。航行中遠州灘で暴風にあい、義貞親王は伊勢へ吹き戻されたが、宗良親王は目的を遂げ、再び遠江の土を踏んだ。宗良親王は上陸すると井伊谷の三嶽山の城に入り、諸国の南朝勢と連絡をとりあった。これに対し足利高氏は南朝勢力の増大を恐れ、延元四年七月高師泰、師兼、仁木義長を遣して攻め、師泰、義長は浜名湖の湖東に、師兼は湖西に活動して、周辺にあった。南朝の諸域を攻略したこの時三嶽城にいた宗良親王は、父後醍醐天皇が八月十六日に崩御になられたとの報を手にし、哀悼の歌を吉野に在る四條隆資の許へ寄せた。

おもふには猶色あさき
もみじかな
そなたの山はいかゝ時雨る　（新葉和歌集哀傷）

師泰、義長等は三嶽城を囲み攻めたため、翌興国元年正月、城は陥落した。さらに親王は、残兵を集めて三嶽城の東方にある大平城を最期の拠点とし七ケ月苦戦したが大平城もまた陥落した。その後親王は越後の寺泊に退き各地を転戦、文中三年吉野に帰り、天授六年『新葉和歌集』を撰した。終焉の地は定説がなく、『大日本史』にも「親王其終る所を知らず」とあるが井伊谷に親王の墓がある。

以上述べたごとく浜名湖周辺の宗良親王の遺跡は多い。この内今回見学した史跡を紹介しておく。

○井伊谷宮

二俣線金指駅から北へ二キロの所にあり、明治二年鎌倉に大塔宮御社、遠江に宗良親王御社を創建することになり宗良親王御社は彦根藩井伊家が造営を引受けた。明治五年二月十二日鎮座祭が行われ、六年六月九日官幣中社に列せられた。

○宗良親王御墓

宗良親王の墓は、井伊谷宮の西に接し、宮と背中合せの位置にある。明治六年十二月四日御墓として治定。当時の宮内省諸陵寮の管轄に属した。南に門があり、二重石柵の奥に墓石が西面している。墓石は高さ五尺八寸六分の宝篋印塔で、寛保二月八月信州伊那郡の旗本和久頼久の建立である。正面に

元中二乙丑年

冷　湛　寺　殿

八月十日

とある。

○龍潭寺

井伊谷宮の南隣にある一大禅刹で、井伊家の菩提寺である。当寺は古く天平五年行基菩薩が地蔵菩薩を安置し、寺を開き八幡山地蔵寺と称したことに始まる。その後寛治七年井伊氏の元祖共保逝去の後、寺中に葬り以後井伊家の菩提寺となる。そして元中二年宗良親王七十四才にて逝去後、この寺に葬り、法名を冷湛寺殿と号したことから寺号を冷湛寺と改めた。永正四年、井伊直盛は今川義元に従って桶狭間にて戦死し、法名を龍潭寺殿と号したので、その法名にちなみ寺号を龍潭寺と改めた。この戦火により建物は焼失し、その後天正十四年再建された。

○方広寺

元中元年に、この地の地頭奥山朝藤が後醍醐天皇の皇子といわれる無文元選禅師を開山として創建した臨済宗方広寺派の大本山である。天正八年に、徳川家の祈願所となり、同十五年には後陽成天皇の勅願所となった。明治十四年に、山火事のため堂宇が焼失したので現在の法堂はその後に再建された。

○大福寺

貞観十七年、教待上人が凰来山に開創し、幡教寺と称した。承元三年大中臣朝臣時定卿が所領二百五十町歩を寄附し現在地に移し、その時土御門天皇から勅額を下賜されて大福寺と改称、末寺頭塔三十、境内二町五反、伽藍建造物二十を有した。

○摩訶耶寺

神亀三年、聖武天皇の祈願所として行基が開創した。庭園は四十三年六月以来度々の学術調査によって世に出され、静岡県最古の古庭園とされる。重要文化財に千手観音、不動明王がある。

○本興寺

もともと真言宗の寺院であったが、永徳三年、日乗聖人が法華宗に改宗した。戦国時代には今川氏を始め豪族の帰依をうけ、徳川家康に至って御朱印地を拝領し、十万石の格式で優遇された。寺域二万五千坪、重要文化財に絹本着色法華経絵曼荼羅四幅、紺紙金字法華経二巻さらに鎌倉期の作と推定される本堂が指定されている。

○新居関所

今切の関所とも言われ、慶長五年徳川家康によって設置された。その後、元禄十四年、宝永五年の二度、津波のため移築された。現在残る建物は安政二年に建てられた面番所で、関所建物として現存している全国唯一のもので、国の特別史跡に指定されている。

なお毎日夕食後と二十七日終日は、史料の読解力を養うため文書講読を行なった。文書は戦国史研究会より大福寺文書及び摩訶耶寺文書のコピーを借用した。ここに改めて感謝したい。

（橋本清記）

合宿参加者

顧問　葉貫磨哉教授
大学院ＯＢ　広瀬　良弘
大学院修士二年　大森　正且
大学院修士一年　松崎　豊美
ＯＧ　横溝　俊恵
学部　四年　川上　淳
三年　橋本　清　小沼　幸子　永井多鶴子
二年　田中　英道　鈴木　信綱
一年　安達　裕好

織田信長研究会合宿報告

今年の合宿は、八月二十七日から九月四日まで行なわれた。今回の目的は、信長の天下布武の道を歩き、また、原文書に直接触れて古文書の購読も行なうというものであった。

八月二十七日正午、清洲駅に集合し、まず清洲城趾を見学した。清洲城は、尾張の守護、斯波義重が応永十二年（一四〇五）頃に築城し、以来二百年ほど、尾張の政治・交通・商業の中心地として栄えた。廃城前の最後の領主は、名古屋城に移った徳川義直であった。

斯波氏の時代には堀は一重であったが、永禄年中信長が城主となってから五十年間は最盛期で、城下町も繁盛し、城は東西約十五、六町、南北約二十六、七町の巨大なものになった。しかし、現在、城跡には信長の銅像があるが、城域は国鉄東海道線と新幹線によって両断され、すっかりこわれている。

翌二十八日は、安土に行き、まず、東家を訪れた。

この東家は、信長の近臣東近家の屋敷で、当時の面影をとどめて現存しているものであり、また、信長の朱印状もあった。この朱印状は、信長から丹羽長秀と蜂屋頼隆に宛てられたものである。

猶々忠節人にて候
別而馳走肝要候
能登国土肥
但馬守為礼儀
罷上候然者上辺
見物事申付候
其元逗留中
宿之儀申付之
八木遣之候別而可
馳走為其染筆
候也
十月十二日　信長（朱印）
惟住五郎左衛門とのへ
蜂屋兵庫とのへ

それから、セミナリオ趾を見た後、安土城趾に登った。ここで安土城について触れてみたい。

戦国乱世の時代を、大胆な行動力と鋭い直感力によって天下統一を成し遂げんとした織田信長が、交通の要地と、戦略上の要地であるところの地理的条件に着目し、ここに居城を築くことを丹羽長秀に

命じたのは、天正四年（一五七六）正月であった。そして同年二月二十三日には、早くも建物の一部が完成したとみえ、信長は岐阜より移住している。その後、観音寺城や長光寺城などから運んだ石で石垣を積んだり、京都や堺の名石や殿舎を移したりして営々と工事を行い、天正七年（一五七九）五月に、金地の障壁をはめ、金箔の瓦を葺いた五層七重の絢爛豪華な天主閣を竣工させている。

日本のルネッサンスと呼ばれる安土・桃山時代の代表たるその広荘雄大な天主閣が、標高一九九mの山上にそそり立ち、琵琶湖に映える姿は、それを見上げる人々を威圧すると共に、信長の権力の絶大さを人々に認識させたことであろう。

しかし、わが国最初の天主閣を中心に縄張りされた近世の夜明けを告げる豪荘な城郭も天正十年（一五七一）の本能寺の変に続く大山崎の合戦に、明智勢の守る安土城に攻めて来た織田信雄の兵が放った火によって、悉く灰燼に帰してしまった。天主閣落成から三年、安土城造営開始からでもわずか六年であった。「人生五十年」と詠い、四十九歳で没した。乱世の英雄・信長の生涯にふさわしい城であった。

二十九日は、近江八幡市の史料館で郷土史家の田中政三さんに会い、観音寺城や織田信長等のお話を聞き、そのあと、町中を案内していただき、昔の船着場や、信長の祖先が出たというお宅に伺ったり、御多忙中にもかからわず、親切に説明していただいた。

三十日は、彦根にある滋賀大学の史料館に行き菅浦文書を見せていただいた。菅浦文書は数千点もあり、あまり膨大なので天正年中だけの文書を見せていただき、閲覧室で撮影すると同時に、残った者は講読をするという方法で、皆、緊張した表情で文書に接した。この文書の中に信長の文書が二通あった。一つは、安土城普請時のものであり、もう一つは菅浦に対する制札であった。

それから近くにある彦根城に登る。ここは江戸時代、井伊三十万石の居城であり、国宝の天主閣が美しく建っていた。

三十一日は、長浜城趾や賤ケ岳を見たあと菅浦に行く。ここは、琵琶湖の北岸にあり、中世惣村の典型として、また、隣接する大浦下庄との間で、日指、諸河という地域をめぐって堺相論がくりかえされきたという歴史的事実でも著名である。

菅浦は、陸の孤島といわれて来たが、数年前、道路が開通し、現在は、ひなびた漁村というような感じのところである。

月が変わり、九月一日は堅田に行き、浮見堂を見てから伊豆神社に行く。ここには、慶長と延宝の検地帳があったが、一冊十cm程もあり、これほど厚いものは珍しいと思われた。

二日。まず比叡山に参詣する。比叡山延暦寺は、今から凡そ一二〇〇年前伝教大師最澄が、根本中堂に不滅の法灯を掲げた。しかし天亀二年（一五七一）信長の焼き討ちにあい、比叡山の法灯は一時消滅したのを、天正十三年（一五八五）豊臣秀吉が比叡山の堂塔を再興した際に、同山の探題豪盛の懇請によって、山形の山寺立石寺より移火したものである。

比叡山を見学したのち、京都に行き、この日の午後と、三日は、自由行動で、各自、寺社や庭園を見たりして、和気あいあいのムードで今年の合宿は終わった。

今回の合宿は、信長の天下布武の道を歩き、かつ、信長の文書やその他の文書もたくさん見ることが出来て、当初の目的を達しえたと思う。

合宿参加者

顧問　所理喜夫助教授

四年　千原　保・内田　進・亀沢泰隆・後藤正春

二年　粟野俊之

OB　橋詰　茂

（粟野俊之記）

仏教美術史研究会合宿報告

我研究会では一昨年度より従来通りの個人研究を重視するとともに、年間統一テーマを定めて、その研究に全員があたるという方法を採っている。今年度もそれに従ってテーマを「密教―その世界と美術」と定めた。そこで合宿もテーマに沿って、高野山とともに密教を展開した比叡山とその周辺を中心に、京都と滋賀の両地域に亙って、八月二十六日より九月一日まで一週間の日程で行なわれた。

自由行動日を一日はさんで毎日、見学に従事し、ミーティングは夜開くという形を採ったのであるが、それは我研究会にとっての生命は、自分の目で直接対象物に接することであり、そうすることによって紙面では気づけなかったことを認識できると考えるからである。実際仏像は本堂に安置されて初めて意味を持つのであり、紙面のみの研究には無理があると思われる。また紙面上の研究は固定観念に陥り易く、それを乗り越えるには多くの見学が必要であろう。合宿のあり方については、各研究会の性格によって異なると思われるが、上述した理由で我研究会は見学を重視した合宿を行なった。

それでは日程に沿って、主な見学地を紹介することにしよう。

二十六日午後一時京都駅集合のあと、我々はまず東寺を訪れた。貞観仏の粋を集めた講堂は、空海の新鮮な創意がうかがわれると同時に、森厳な雰囲気が堂内にあふれ、我々を曼荼羅世界に誘うのである密教芸術研究には欠かすことのできない場所である。

二十七日には、愛宕山の山腹にある月輪寺と高雄神護寺を訪れた。月輪寺は清滝から一時間半程山坂道を登った所にあるが、千手観音像、阿弥陀如来像、空也上人像など多くの仏像を有する。神護寺には同時代でありながら面目を異にする金堂薬師如来立像と多宝塔内五大虚空蔵菩薩がある。前者は堂々たる体軀、雄偉な風貌で知られ、後者は豊艶かつ官能的表現をもって知られている。

二十八日雨。予定変更で自由行動日となり、各自思い思いの一日を過ごす。

翌二十九日。雨も上がり上醍醐へ登る。神護寺への道といい、こ上醍醐への道といい「山の仏教」の修行の辛さが身にしみる。午後からは、二十七面を有する千手観音立像を法性寺にて拝観した。また法性寺五大堂にあったとされる不動明王を、東福寺塔頭の同聚院にて拝観した。

三十日。京都を出て滋賀県に移る。草津からバスで十五分程で芦浦に至る。この地には近世を通じて船奉行として琵琶湖の湖上権を独占した観音寺がある。美術品も数多く有するが、大部分鎌倉以後のものである。また近くの常教寺には、地方色を感じさせる貞観期の聖観音立像が安置されている。午後からは比叡山に登ったが、霧が深く「山の仏教」の厳しさをここでも感じさせられた。

見学日最後の三十一日。甲賀郡甲西町にある寺々を廻った。永照院・上乗寺で貞観期の作である十一面観音立像を拝観した。ともに

重文に指定された秀作である。この他善水寺には各時代に亙る多くの仏像があり、滋賀県の文化について再認識を迫られた。

以上が今合宿の主な見学地であるが、最後に今合宿で出された問題点と、それに対する私見を述べて合宿報告を終えたい。

まず最初に、去年「天平彫刻—国家仏教とその美術」のテーマに基づいて見学した奈良の寺々が、平城京を中心に栄えたのに対し、今年の延暦寺を中心とした寺々は、深山幽谷に発達した「山の仏教」と言うことができると思われるが、その違いはどこから出てきたのかということである。

これは奈良時代の仏教は、一般に言われるように隋・唐で成立した教学をそのまま伝来移植したもので、受け入れた学僧達も先進国の学問水準に到達しようと各宗の経論を理解・解釈することが精一杯で、独自の学説を立てるまでには至らなかった。すなわち、学問研究の範囲を出ていないのであり、思弁的色彩が強く、実践面が欠けていた。従って民衆教化の活動はほとんどなくて、ただ権力と結びついていただけにすぎなかった。

それが仏教というものは理論だけを追求してもその心は摑めず、修行というもの、体験というものを媒体として摑むものと理解されるようになり、奈良仏教に欠けていた実践面（修行）が重要視され、その場所を俗世間から離れた静寂な場所である山に求めた。すなわち、山において瞑想し哲学を練るという修行をするなかで、もっと宗教的活動といえるものがどういうところにあるかを模索する「山居の僧尼」が各地に現われるようになったのである。そのうちに、空海・最澄が現われて、修法を重視する密教と相俟って「山の仏教」が定着したと考えられる。

だから最初は、布教というよりもむしろ自分自身の宗教的悟脱を山のなかで求めていくのが第一で、そのなかから実際の活動者が現われるようになったと考えられる。さらにそれから、浄土系の者が出て、鎌倉新仏教の出現に伴って、仏教は「山の仏教」から「里の仏教」へと展開したと考えられる。

次の問題として、昨年度見てきた天平仏が円熟した人間感情を表現し、優美平明な様式であったのに比べ、今回数多く拝観してきた貞観仏といわれる全く異質な、神秘的な像が造られるようになったのはなぜか。またこれと関連するが、貞観仏の代表とされる神護寺金堂の薬師如来立像が（製作年代ははっきりしないが、延暦年間前半とされている）天平時代と接した、密教の成立もみない時代に生まれたのはなぜであろうか。

この問題に関しては、様式的にみて唐招提寺にある「トルソ」と呼ばれる諸尊の流れをくむものではないかなどいろいろ言われているが、やはり仏教の発達に伴って考える必要があろう。すなわち、現在に残る天平仏は東大寺三月堂諸尊にしろ何にしろ、官立の造仏所で造られたものである。しかしこの時代にも皇族・貴族の仏教のみでなく、行基などによる民間仏教の流れはあったのである。そうした者のなかからこころある者は、腐敗した都市仏教をきらって山にこもったのである。そして山に入った修行僧が日夜祈る仏像は、奈良の宮寺の優美な仏像とは異なって、苦行に耐えぬくたのもしい肉体と、強烈な意志をもった仏像が好まれたであろう。このように修行僧等によって彫られた仏像こそ貞観仏の発生と言えるであろう。

他にいくつか問題が出されたが、紙面の制限によって後日の機会

に譲りたい。

合宿参加者

顧問　葉貫　教授　　二年　清水　玲子　　OB　新田　浩
大学院　伊東　謙助　　寺田久美子　　伊藤　祐道
四年　町田　知子　　一年　石戸　敏弘　　帯刀　博士
三年　石塚　朗人　　川島小夜子　　会員外参加
大塚　真弓　OB　有元　修一　　二年　寺田　弘

（石塚朗人記）

近代史研究会夏期合宿記

七六年度夏期合宿は、八月三十日より翌月三日迄の五日間、山梨県北巨摩郡清里で行われた。

普通、研究会は週二日ひらかれ、一日を研究発表、もう一日を史料講読にあてている。合宿においても、史跡見学等に制約を受けない近代史研としては、どちらを中心にすすめて行くか、様々な意見があるが、昨年度の反省を踏まえた上で、今回は、統一テキストによる史料講読と決まった。

さて、本年度の研究会の統一テーマは、「昭和初期の対外交渉史」であり、研究発表も日本帝国主義のその時期における中国・朝鮮に対する侵略と国内事情にスポットをあてていた。しかし、「昭和初期（便宜的に、日ソ国交回復より日中戦争迄）」の範囲を扱う為には、その時代の前後にも目を触れなければ、「流れ」としての歴史は把握できないだろう。そこで、合宿においては、本年度のテーマの「前史」とも云える大正期の外交関係の史料を特に選んでテキストを作成した。一方、会員には、夏期休暇中に『太平洋戦争』（家永三郎著）を指定し、後期に読後討論会を設けることにより、「後史」としての十五年戦争の概略にも接せられるよう計画を組んだ。

テキスト作成については、外務省外交史料館にも何度か足を運んだが、結局、コピーの都合もあり、外務省編纂による『日本外交年表竝主要文書（上下）』より数点の史料を左記の通り選出することとなった。

1　支那に関する外交政策の綱領（一九一三年）
2　対華要求に関する加藤外相訓令（一九一四年）
3　遣米特派石井大使に附与せられたる訓令及内訓（一九一七年）
4　中国に関する日米両国間交換公文（一九一七年）
5　中国に関する九国条約（一九二二年）
付　満州鉄道概見図（一九三一年）

以上の史料の流れを追ってみると次のようになる。1は、外務省阿部政務局長による対支那（満蒙）政策概要であり、「満蒙問題」から始まり「外交の統一」迄の十項目より成り、当時の外務省サイドからの中国に対する外交の在り方を述べ、軍部の「満蒙ニ対シテハ新ニ領土獲得ヲ目的トスルカ如キ企図」を批判し、また外交については、「外交ハ総テ外務省ヲ以テ之ヲ統一シ陸海軍両省ハ勿論参謀本部軍領部等ノ如キ諸官衛皆政府の方針ニ遵守シ決シテ之ニ背馳」してはならないと、軍部の外交に対する干渉を戒めている。とは云え、彼自身語るところの「平和的経済的」な「確保発展」も武力をもちいないと云う意味のみであり、究極的には後の幣原のように、侵略への方法論の域は出ていないのだが、後がこれを書いた一年後、「軟弱」を批判され右翼に暗殺されていること等を考えてみ

るとなかなか興味深い史料であると言える。

以下の史料は、有名なものばかりで、2は所謂「対華二一ケ条要求」、3・4は石井・ランシング協定、5はワシントン会議の九ケ国条約である。これ等の史料を見る時は、日本の中国に対する考え方は勿論、帝国主義各国間の情勢を忘れてはならない。第一次世界大戦と云う「天佑」のもとで、列強各国の目が欧州に向いているすきに、日本は中国に強硬な要求をし、参戦したアメリカとの間に日本の「特殊権益」を一応認めさせた石井・ランシング協定を結ぶ。戦後、それは九ケ国条約によって廃棄されるのであるが、ワシントン体制自体、単に東アジアにおける帝国主義間の一時的「安定」に他ならなかった。これ等の流れを見るのが、史料を選んだ目的だった。また、史料中に出ている中国の地名も重視する必要がある。特に現在と名称が異なる場合も多く、その確認の為に「満州鉄道概見図」も併せてコピーした。

合宿では、三日間に渡りこのテキストを使用し史料講読を行った。普段の研究会においての史料講読では、『近代史史料』(大久保利謙編)を使用しており、史料の抜粋が中心の為、今回のテキスト使用に際してはいくらか不慣れな面が感じられた。また、例えば、このテキスト中で最も有名と思われる対華二一ケ条要求にしても、初めて全文に触れた会員も多く、抜粋中心の今迄の史料講読の在り方に警鐘となったと思う。結局、合宿のテキストとして量は決して多いと云えないのだが、やはり時間が不足し、なかなか背後関係迄充分に把握できなかったのが現状で、これは必ずしも時間的制約だけでなく、各人の準備不足があり、反省点の一つとなった。

さて、史料講読関係に随分紙面をさいてしまったが、「合宿」と云うものを考えた時、各会員間の親睦も重視したいのが私の偽らざる心境である。これは何も「遊ぶこと」だけを意味しているのではなく、特に新入会員にとっては上級生を知る、私達にとっては彼等を知る絶好の機会なのだ。相手を知ることによって会話が生まれ、議論に発展して行く。そのコミニケーションの場としての合宿の役割を振り返った時にも、私達は多くの反省点を見い出さざるをえない。後期にひらかれた合宿反省会においての「勉強も遊びも中途半端だった。」の意見の意味は大きい。また、合宿の反省会が、いつの間にか、会の在り方に迄、議論が進んでしまい、この様なことは今迄には無く、各会員の研究会に対する意識の強さにも驚かされた。近代史研究会は、この合宿における反省点をそれだけには終わらせず、今後の会の在り方に迄、発展させて行きたいと考えている。

最後に、テキスト作成に助言をして下きった顧問の山口先生、合宿に参加して下さった諸先輩の方々に感謝の意を表してペンを止めたいと思う。

(鍋田英一記)

合宿参加者

大学院生　岩崎　孝和　渡辺　政則

三年生　大原　隆治　黒川　和幸　鍋田　英一

二年生　遠藤　優　林　彰　横山　眞一

友井　聖子　早船　百合　細野　才子

一年生　塚田　千顕　大村　尚子　岡真　佐枝

服部　直子　山崎　光子

OG　初瀬多恵子

以上十七名